

# 高校生がネット上における仲間内攻撃行動を目撃した際の行動(1)

## —被害者との関係性別の集計結果—

○堀内由樹子<sup>1</sup>・樫淵めぐみ<sup>2</sup>・熊崎あゆち<sup>1</sup>・鈴木佳苗<sup>#2</sup>・八巻龍<sup>#2</sup>

(<sup>1</sup>お茶の水女子大学 <sup>2</sup>筑波大学)

### 1. 問題と目的

近年、携帯電話等のメディアの普及に伴い、ネットを用いた学校の友人に対する攻撃行動が見られるようになった。このような攻撃行動を目撃した生徒たちの行動は状況を沈静化させたり、悪化させたりする効果があると考えられるが、こうした行動の選択には生徒と加害者や被害者との関係性が影響すると思われる。そこで、一連発表の(1)では、目撃者と被害者との関係性に着目し、目撃した際の行動との間にどのような関連があるのか、モバイル調査により検討した。

### 2. 方法

**対象者** まず、2639名の高校生を対象にスクリーニングを実施し、『ネットでの悪口の書き込み』など、比較的生起頻度の高い5種類のネットを介した仲間内攻撃行動に遭遇したことがある者を、攻撃行動1種類につき100名ずつ計500名抽出した。この500名から加害者と被害者を除いた目撃者420名を分析対象とした(悪口書き込み:82名、悪口メール:75名、陰口メール:87名、個人情報暴露:85名、仲間外し勧誘書き込み:91名)。

**測定項目** **目撃者の行動経験** 攻撃行動を目撃した際に、攻撃行動への参加や扇動を行う『追従観衆行動』、被害者に対する慰撫を行う『サポート行動』、攻撃の制止や仲裁を行う『攻撃抑制行動』の3つの行動カテゴリに当てはまる行動リストを、5つの攻撃行動の種類別に作成した(攻撃行動の種類により同一カテゴリに含まれる目撃者の行動リストは異なっていた)。この行動リストのそれぞれについて経験の有無を尋ね、カテゴリ内の行動のうち1つでも「経験有り」の場合に当該行動カテゴリの「経験有り」とした。さらに、3つの行動カテゴリのいずれも「経験無し」の目撃者のうち、「特に何もしていない」と回答した場合を『傍観行動』の「経験有り」とした。 **被害者との関係性** ネットを介した仲間内攻撃行動の被害を

うけた人物との関係性について「あなたがよく話す子」、「あなたが時々話す子」、「あなたがほとんど話をしない子」、「誰がされたかわからない」の4項目で尋ねた。

### 3. 結果と考察

各行動の経験率を被害者との関係性別に集計した結果を図1に示した。追従観衆行動の経験率はほぼ一定であり、被害者との関係性による影響は見られなかった。傍観行動は、被害者との関係性が遠くなるほど、経験率が高くなっていった。逆に、サポート行動、攻撃抑制行動はともに被害者との関係性が近くなるほど、経験率が高くなっていった。被害者との関係性が遠いことは、被害者の精神的な苦痛を感じていることや援助が必要な状況に気づきやすいため、サポート行動や攻撃抑制行動などの援助的な行動に対する動機づけが高まったと考えられる。

### 4. まとめ

本研究の結果から、被害者との関係性と目撃者の行動の間に関連性があることが示された。今後は、被害者との関係性以外の要因についても検討をする必要があるだろう。

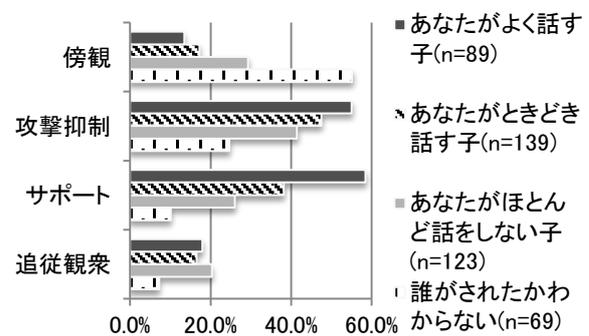


図1 被害者との関係性とネットを介した仲間内加害行動を目撃した際の行動の経験率

註)本研究は最先端・次世代研究開発支援プログラム「ネットいじめ研究の新展開—「行動する傍観者」を生み出すプログラム—」(代表:鈴木佳苗)の助成を受けている。